

詩人ナージム・ヒクメットが詠んだ原爆

新井 春美

ナージム・ヒクメット（1902-1963）はトルコの代表的な詩人、作家、社会運動家である。

オスマン帝国のテッサロニキ（現ギリシャ）の裕福な家庭に生まれたヒクメットは、19歳でソ連に渡り現地の大学で学んだ。



トルコへ帰国した後は政治活動によりたびたび投獄されたが、釈放運動も起きるなど、生前より国内外で詩人・作家として、また平和活動によつても有名であった。しかし当時のトルコ政府は共産主義者を厳しく取り締まっており、ヒクメットもその政治活動等を理由に国籍をはく奪され、晩年は亡命先のソ連や東欧で過ごした。トルコ国籍が回復されたのは死後の2009年である。

詩作はイデオロギーを前面に出したような作品から、次第に季節の移り変わりと孤独を詠んだ *Güz*（秋）、公園のクルミの木を擬人化した *Ceviz Ağacı*（クルミの木）など人々の生活や心情、あるいは社会の問題を扱った作品が多くなり、現在は国民的詩人として親しまれ、作品は教科書にも掲載されている。

ヒクメットの作品のひとつに1955年に作られた *Kız Çocuğu*（少女、女の子）というタイトルの詩がある。これは、広島に投下された原爆で亡くなった少女を詠んだものである。ヒクメットは日本に来たことはないが、第五福竜丸事件（1954年、漁船福竜丸がビキニ環礁にてアメリカの水爆実験により被ばくした事件）に関する *Japon Balıkçısı*（日本の漁師）という詩を残している。

日本では *Kız Çocuğu* を中本信幸が翻訳、外山雄三が曲を付け、1967年に楽曲として発表された。また坂本龍一のプロデュースにより、^{はじめ}元ちとせさんが「死んだ女の子」というタイトルで歌っている。トルコの世界的ピアニストのファジル・サイも、トルコ人少女の歌唱とともにコンサートで演奏している。このほかにもトルコをはじめとして世界各国のアーティストがこの詩を基にした楽曲を演奏してきた。

以下に「少女」を紹介したいⁱ。失われた命へのヒクメットの深い思いと、少女を通して戦争の悲惨さが強く伝わってくる。

少女

ナージム・ヒクメット

ドアをたたくのは私
一つ一つのドアを
あなたの目に私は見えない
目に見えない死者
広島で死んだときから
10年すぎた
7歳だった少女は、
大きくなれない死んだ子ども

はじめに髪が燃えて、
目が焼けた
私はあっという間に一握りの灰になって、
灰は空へ舞い上げられた
自分のために
ほしいものは何もない
飴さえなめることができず
紙のように燃えた子ども
あなたのドアを私はたたく
大人たち、署名して
子どもたちが殺されないように
子どもたちが飴をなめることができるように

ⁱ トルコ語の詩はミッリエト紙による <https://www.milliyet.com.tr/siirler/nazim-hikmet-ran-siirleri/kiz-cocugu-siiri-nazim-hikmet-6474881>